

第2回世界農学部学生会議参加報告 —農学部の国際化とマインドセット—

長谷川英夫*・ウィタカ アンドリユー・近藤孝之・高橋もなみ

(平成23年1月6日受付)

要 約

2010年7月10日から20日にかけてマレーシアプトラ大学で開催された第2回世界農学部学生会議 (IASS) に学部生2名と参加する機会を得た。参加に至る学生自身の準備作業と指導内容を記録するとともに滞在期間中に日々成長していく学生達の姿を通じて、農学部のより一層の国際化に向けたマインドセットについて考察した。

新大農研報, 63(2):127-131, 2011

キーワード：国際化、マインドセット

1. 世界農学部学生会議

世界農学部学生会議 (International Agriculture Students Symposium、以下、IASS と略記) とは、2009 年度からマレーシアプトラ大学 (Universiti Putra Malaysia、以下 UPM と略記) が主催し、①地球規模で農学部生の相互理解と経験の共有を促進すること、②世界中の農学部生との国際的ネットワークの形



図1. IASS Brochure



図2. IASS 実行委員会前列右5番目:Mad Nasir 農学部長、6番目: Aziz 副学部長、7番目: Boey Tze Zhou 実行委員長) 農学部講堂前にて

成と協同、③参加大学の農学的知見と国際的文化の理解促進を目的としている (2nd IASS Brochure, 2010) (図1, 図2)。本学は第1回から参加しており、今回が2度目の参加となる。IASSは統率された学生組織によって運営がなされている。運営はUPMの各学部設置された学生委員会の1組織である農学部学生委員会が主体となり、さらにその内部にIASS組織委員会が設置されている。IASS実行委員会は、Chairman, Vice Chairman (Internal, Community & Networking, International, Academic), Secretary, Vice secretary, Treasurer から構成される。そして各 Vice Chairman の下に ① Diplomatic & International Committee, ② Academic Committee, ③ Corporate Committee, ④ Publicity & Multimedia Committee, ⑤ Program Planning & Souvenir Committee, ⑥ Special Task Committee が存在する本格的な分業体制である。各委員会は5名から最大20名の2年生を中心とした学部生で構成され、

第1回 IASS を組織した上級生がノウハウの継承を兼ねて下級生をサポートする役割を担っていた。IASS の運営でさらに驚かされることは、運営に参画する省庁、学協会、そしてスポンサー企業の存在である。この点については後述する。

2. マレーシアプトラ大学

マレーシアプトラ大学の歴史は、1931 年の農業学校に始まる。1947 年にはマラヤ農業カレッジと改名され、1948 年に大学へ昇格し、1971 年にはマレーシア農業大学が設立された (Universiti Putra Malaysia Website, 2011)。その後、1997 年に当時のマハティール首相によりマレーシアプトラ大学と改称され現在に至る。2011 年現在、16 学部、9 つの研究所、2 つの研修所、1 つのアカデミー、300 以上の分野に渡る大学院プログラムが開講されているマレーシア重点大学の 1 つである。

3. 学生募集

2010 年 3 月、IASS 実行委員会から第 2 回 IASS の開催通知を受け取った。2009 年 2 月に農学部の学生と教員が第 1 回 IASS に招待された返礼として、2009 年 9 月の第 3 回農学部国際シンポジウムに 2 名の学部生と副学部長 1 名を招聘して以来、筆者は UPM の教員とともに学生達と交流を続けていた。IASS 実行委員会からの依頼は、農学部生であること、過度に専門的な研究 (発表) 内容でないことであった。農学部教職員のメーリングリストを通じて早速参加希望の学生を募ったところ、農業生産科学科 2 年生と生産環境科学科 4 年生から応募があり、定例の教授会に諮り派遣の承認を得た。2 人の学生達は早速テーマ探しを始めた。

4. 教員の指導内容

生産環境科学科 4 年生は新潟県の特徴を反映した卒業研究を指導教員の下で既に行っていることから、この研究内容で発表することを勧めた。ところが、2 年生は専門的な講義を受講し始めたばかりで、4 年生のように卒業論文の指導担当に類する教員もおらず、海外渡航や学術的な口頭発表の経験もなかった。そして何より IASS の詳細が電子メールを通じて次々と明らかになるにつれて、英語力に大いに自信がないという理由から、応募時に見せた当初の意気込みは消沈しかかっていた。そこでまず、本学を志望した理由や IASS 参加への動機などを聴取しながら、当該学生に適切な発表テーマについて検討を重ねた。その中で学生は、かつて本学農学部在職し、長年ムスタン (ネパール) で国際協力活動に従事する近藤 亨氏に憧れて本学の門を叩いたことを語り始めた。なかでも、農業分野の技術協力を通じて世界平和に貢献したいという純粋無垢な希望に心を動かされ、引率者という義務感を離れて心底から支援することに意を強くした。こうして学生の英語力に一抹の不安を抱えながら、上述の希望を叶えるために都会育ちの学生が農業現場での過酷なアルバイトから日々学んだ内容をまとめるべく指導を始めた。いざ作業を進めると、学生達は英語での口頭発表の経験がない上に発表内容を英語で組立てることに苦心していた。そこでまず、口頭発表で伝えたい内容の概略について、1 つ 1 つの発表用スライドを意識しながら日本語で原稿を準備して次回の手合わせに持参するよう指示した。他にも効果的な方法があるかもしれないが、学生自身が伝えるべき内容を取捨選択し、論

旨の組立てを自ら考える機会を与えることが目的であった。こうした作業を通じて、専門的な講義の入口に立った 2 年生にとって単に口頭発表の経験を積むということばかりでなく、自らのこれまでの経験を総括して自分自身を表現するという教育的な効果が極めて大きいことを実感した。数回の打合せを経て発表内容の日本語による概略は完成した。4 年生は指導教員らの助言を受けて比較的順調に口頭発表に使用するスライドの製作を始めた。2 年生に対してはスライドの効果的な作成方法について指導を重ねた。

IASS の開催まで 1 ヶ月を切った頃から、外国人教員を発表練習会にお招きして、スライドの英文表記と発表用原稿の校正をお願いした。学生たちにとっては、ネイティブスピーカーの指摘事項を修正していく過程で英語らしい表現とは何か、効果的なスライド作成の秘訣、そして何より想定される質問への応答について実践的な指導を受けることができる貴重な機会となった。

5. IASS の様子

約 3 カ月に渡る準備作業を経て成田から 7 時間、クアラルンプール空港に降り立った。空港では笑顔に溢れた IASS メンバーが出迎えてくれた。空港から高速道路を 1 時間程度走って Selangor の UPM キャンパスの宿泊所に到着した。ここは UPM に留学する世界各国の留学生が生活する International college であるが、IASS の開催期間中は各国参加者を男女別棟に分けて収容し、中には IASS の学生スタッフとともに 2 人 1 部屋で共同生活をする。IASS の学生スタッフの多くはキャンパス内の学生宿舎に居住しているが、今回のシンポジウムのために各国学生と寝食を共にして親睦を深めたいとのことであった。学生たちの部屋は机、衣装箆、机が各二つずつ部屋の真ん中の仕切りを隔てて設えてあり、天井には大形のプロペラ式ファンが勢よく回転していた。学生によると、初日は蚊の猛

表 1. 参加大学一覧

Country	University	participants
Australia	University of Adelaide	2
Indonesia	Batanghari University	3
〃	Bogor Agricultural University	12
〃	Universitas Gadjah Mada	1
India	Govind Ballabh Pant University of Agriculture and Technology	1
〃	Punjab Agricultural University	1
Japan	Niigata University	3
Sri Lanka	University of Peradeniya	3
Thailand	Kasetsart University	2
〃	Mahidol University	2
Viet Nam	Nong Lam University	3
Malaysia	Universiti Putra Malaysia	14
Oman	Sultan Qaboos University	12



図3. Opening Ceremony のあとはもう友達

攻撃を防御することで夜を明かしたとのことであった。参加大学を表1に示す。昨年の第1回は、宣伝不足と開催時期の関係からUPM、ボゴール農科大学そして新潟大学のわずか3大学の参加であったことを考えると格段の進展であった。

初日の夜、農学部講堂にてOpening CeremonyがProf. Datin Paduka Dr. Aini Ideris 学術・国際担当副学長、スポンサー企業らを招いて盛大にとり行われた。その後は学生達によるアトラクションがにぎやかに行われた(図3)。今回のシンポジウムは、UPMの全学的な支援のほかにマレーシア高等教育省および農業省の共催という形で開催された。さらに、IOI Group, Tradewinds Plantation Berhad, Agricultural Chemicalsといった民間企業、そしてMalaysian Soil Science Society, Malaysian Society of Plant Physiologyなどの学協会が全面的な支援を行っていた。ここに至る過程でIASS実行委員会は、10日に渡るシンポジウム開催経費を賄うために、提案書を自ら作成して各団体でプレゼンを行い、寄付および協力依頼に係わる幾多の面接試験を突破しなければならなかった。Mad Nasir 農学部長は、学生自身によるシンポジウム開催の企画立案作業と並んで企業・団体への提案書の作成とそのプレゼンで学生が身に付けるスキルは、インターンシップと別の次元で教育効果が高いと感慨深く力説された。

6. 学生達の成長と教員の雑感

IASSの開催期間中、学生達に1つだけ守ってほしいことを伝えた。日本人だけで話す機会を極力減らすということである。折角の海外渡航の機会を得ているのだから、海外の同世代の学生とコミュニケーションする時間を少しでも増やなさいという意図からである。そのことを学生たち自身忠実に守ってくれ、自らの見聞を広めるのに大いに役立ったと確信している。学生達には、2人で共同で行う日本の食料生産の現状に関する講演、そして各自1つずつの講演を行った。最初の食料生産の現状に関する講演では、講演内容の英語原稿の完成度が高かったため、発表は滞りなく終了した。しかし、問題はその質疑応答であった。聴衆の質問内容を理解できず、二人はパニックに陥ってしまった。この発表から学生達は帰国してから何を心がけるべきか、身につけるべきかについて真剣に考えるようになっていた。パニックに陥ったことで学生の落ち込みを心配していた

が、その心配も無用で日を追うごとに積極的に会話の輪に加わる姿を見て成長を実感した。UPMをはじめとする学生達が日本人学生の話す内容を少しでも理解したいという姿勢、質問者が発した内容を聴衆が分かり易く言い換える姿勢を2人の学生は会議の一員としての一体感と感じ取り、以後の積極性を失わずに済んだ理由であったように思う(図4)。IASSでは講演会以外にマレーシアを代表するエネルギー作物であるオイルパームの研究所見学、官公庁が立ち並ぶプトラジャヤの観光と農業省訪問、そしてマレーシアの国有石油企業ペトロナス所有の超高層ツインタワーも見学し、アジア新興国の著しい経済発展を目の当たりにした(図5)。こうして10日に渡るIASSの無事終了し帰国の時を迎えた。深夜便での帰国であったにもかかわらず、IASSの学生達は夜遅くまで空港に滞在し、残り少ない親睦の時間を名残惜しそうにしていた(図6)。引率した教員としては、マレー系、中国系、インド系などからなるマレーシアの多民族性、アジア新興国の著しい経済成長、熱帯農業分野のCOEを目指すUPMの底知れないポテンシャルを痛感した。明治以来の欧米志向がわが国の経済成長と発展に大いに寄与したことは事実であろう。しかし、低成長と人口減少の時代に入ったわが国の現状を想うと、同じ域内にあるアジア新興国との連携が如何に重要であるかを改めて肌で感じた10日間であった。次世代を担う学生達の交流が末永く続いていくことを願わずにはいられなかった。



図4. 緊張した面持ちで発表する学生達



図5. ペトロナスツインタワーにて



図6. クアラルンプール空港での別れ

ることになろう。最後にそうした意味で、農学部生が国際的な活動の拠点とする学生委員会の創設をここに提案したい。IASSのような国際会議や海外からの来訪者の対応に積極的に農学部生が関わる仕組みを構築できれば、学生から学生へとノウハウの継承と蓄積が可能となる。その実現のためには、確かな専門知識に裏打ちされた国際的人材を育むというマインドセットの転換が教職員にも必要となろう。

引用文献

IASS. 2011. 2nd IASS Brochure. pp.1-11.

マレーシアプトラ大学 website『UPM History』 Available

From <http://www.upm.edu.my>

7. 新潟大学農学部の国際化に向けて

食料問題や環境問題など一国の努力だけでは解決が困難であり国際的に協調して取り組むべき課題が顕在化している。日本有数の稲作地帯を有する新潟県に所在する本学農学部は、これらの地球的規模の課題に対して「農学の視座」から問題の解決にあたる国際的人材の育成を鮮明に打ち出してはどうだろうか。これまで一部の学科では、地方公務員、地元企業などに人材を輩出することを旨としてきた感があるが“Think locally, Act Locally”にのみ囚われていなかっただろうか。この機能は、地方大学の使命として筆者も十分に認識していることである。しかし、大学全入時代における本学部の入学志願倍率、そして入学後の学生の勉学に対する姿勢をみると、偏差値競争の底ささえに近い感覚を覚えることがある。本学部に入學すれば地域に根差した教育研究はもとより、国際協力機関と密接に連携した教育研究の展開とキャリアパスがあることを示せば、受験生に対して一層魅力ある農学部の姿を提示できることにはならないだろうか。こうした活動は、国際社会に対して「新潟大学の顔が見える国際協力」を示すことにも直結することになろう。ところが、2009年の着任早々、第3回農学部国際シンポジウムで事務局長を担当した際に、A4用紙1枚の引き継ぎ資料も提示されず、幾多の準備会合の資料作成も含めて、海外参加者約25名の推薦状、招聘状、ビザ申請書類、First Circular, Second Circular, Certificationをスクラッチから1人で作成したことは一体何を意味するのか。真の意味で国際協力分野を自ら切り開いてきた骨太の経験とノウハウが蓄積できていないのではないだろうか。本学では国際化を語る以前にこうした課題を克服する必要がある。

教員はさておき、学生の国際的センスを涵養するにはどうしたらよいだろうか。新潟大学は、前述のように日本有数の稲作地帯である新潟県に位置している。その特徴を生かした教育研究の知見を海外に発信することでその存在意義を発揮できると思う。その過程で学生に海外に出て行く機会を継続的に与え、同世代の外国人と交流して異文化を理解する訓練を積むことは、単に研究室レベルでの国際会議発表の業績稼ぎよりも優先されるべきであろう。そうした意味で本年3月に開催される新潟大学GPによる『「グローバルジムシステム」による農力開発』では、学術交流協定校を含む3大学を新潟に招き、各大学の教員から当該国の農業とそれを取り巻く現状についての講義と同行学生達との交流は、農学部生に得難い国際理解の機会を与え

Report on the 2nd International Agriculture Students Symposium -Internationalization and Mindset-

Hideo HASEGAWA*, Andrew WHITAKER, Takayuki KONDO and Monami TAKAHASHI

(Received January 6, 2011)

Summary

This paper describes the participating report on the 2nd International Agriculture Students Symposium held in Universiti Putra Malaysia from 11 to 20 July 2010. In this report, preparatory works by students, guidance and advice by teaching staff, and growth and development of their mindset for internationalization during this symposium are recorded in detail. In addition, this paper specifies steps toward a further internationalization of the Faculty of Agriculture, Niigata University. In particular, the foundation of a student association that manages and organizes international activities, and communicates with foreign students is strongly needed.

Bull.Facul.Agric.Niigata Univ., 63(2):127-131, 2011

Key words : internationalization, mindset